

柳ヶ瀬を楽しいまちにする!

岐阜大学工学部准教授 出村 嘉史

岐阜の中心市街地「柳ヶ瀬」では、この10年の間にまちを面白くする取組みの試行錯誤が連鎖して、コロナ禍の最中にある現在においても新しい未来が創られる期待が高まる。毎月第3日曜日に開催されるSUNDAY BUILDING MARKETは6年以上継続しており、都市再生推進法人に認定された柳ヶ瀬を楽しいまちにする株式会社も奮闘中。中心市街地活性化基本計画の第3期には、より具体的・実効的な内容が盛り込まれるようになった。最近では、道路空間活用や公共空間(公園など)活用の社会実験も公民連携で実施されている。背景では公民を越えた人のネットワークが形成されており、「新しい商いが生まれるまち」というビジョンが共有されつつある。

1 柳ヶ瀬というエリア

岐阜市の第1期中心市街地活性化基本計画(2007)は、前身の中心市街地活性化基本計画(2002)が市街地全体をテーマパーク化するビジョンを掲げていたことと比較して、「まちなか居住」「商業活性化増進」「賑わいの創出」とより踏み込んだ基本方針を数値目標とともに示している点に特徴があった。当時の気分としては、記憶にあるかつての賑わいを取り戻すために、居住を含めて人を中心市街地に集めることが最重要という考えが共感を博したに違いない。この方針は第2期中心市街地活性化計画(2012)まで続く。この間、活性化すべき対象として特に焦点を当てられたのが、9haの柳ヶ瀬エリアである(図1)。

図1 岐阜の中心市街地



出典：『岐阜市中心市街地活性化基本計画』(2018)に筆者加筆

このエリアは、長良川と金華山に彩られる岐阜の歴史の中では比較的新しいエリアであり、岐阜の町衆の手によって「市区改正」が実施された明治20年代に形成された新市街地である。戦前には金津遊郭の門前として小売・飲食そして興業の地として発展し、戦災後にも繁華街として返り咲く。床を積み上げても問題なく収益を生み出した柳ヶ瀬エリアでは、1970年代までに今に遺る個人あるいは共同所有の多彩なビルが建設され、20世紀末にはデパートや大型スーパーが林立する揺るぎない岐阜の中心市街地として確立していた。まちの区画ごとに商店街振興組合が組織され、その大半は柳ヶ瀬商店街振興組合連合会（柳商連）に束ねられている。

20世紀が終る頃には柳ヶ瀬の商業もかつてのように振るわなくなる。デパートなどの撤退が相次ぎ、21世紀はじめの10年間で市街地は多くの空き店舗や空きビルを抱えるようになってしまう。2010年頃、柳商連が具体的な目標を掲げてこの状況に対して精力的に対処しはじめた。すなわち、空き店舗を顕在化すること、駐車場料金の高騰に制限をかけること、反社会的勢力を排除すること、イベントを連続させて賑わいを持続させること、閉鎖的な組合を開いて人材を育成することを目指した。当時柳商連の理事長だった市川博一さん（現在、後述するまち会社の相談役）がリーダーシップを発揮し、岐阜県と連携して多くの成果があげられた。その尽力により次世代が展開できる足掛かりができたといえる。

それでもこの時期には、空き店舗の増加に歯止めがかからず、県などの補助金による支

援を得た大きなイベントを打つことにますます力を入れ、知名度を高めるため、刹那的でも集客を繰り返すよりほかに手がないものと考えられた。他方で、市街地再開発事業に解決を求める動きも同時に起こっている。2011年に都市計画決定した柳ヶ瀬の一画0.9haが「柳ヶ瀬活性化の起爆剤」として大規模な商業床と高層の住居の開発が進められた。実際、中心市街地活性化基本計画の目標値においても、この再開発事業の成果をもって達成させようとしているものが多い。この事業は、着手までに時間がかかっており、現在も工事中で、竣工は2022年の予定である。

このような公共事業性の高い中心市街地活性化の取組みは、行政及び組合が公平性に気を配りながら公的資金を投入して大きな箱を整備し、より規模の大きな効果、すなわち賑わいを得ることをめざしていた。しかし、いずれの方策にも持続性を保証する仕組みは備わっておらず、それでも持続しなければ初期投資を回収できないため、運営の負担が大きく、構築したシステムを無事に動かすことが最重要となる傾向が強い。特に市街地再開発事業は、そのエリアへの期待、需要が高まらない限り成功しない。この時期、かつての賑わいを取り戻すことを第一に掲げ、刹那的イベントを繰り返し、壮大な再開発構想を抱いたが、これらに対比される目の前に広がる現実のまちに対する興味や期待は悉く低下することになり、かえって実質的な賑わい創出が難問になっていた。

2 SUNDAY BUILDING MARKET の誕生

同時期に次世代のプレイヤーたちは、別の角度からまちを見はじめていた。2004年にスタートした複合店舗、やながせ倉庫は、岐阜市街地に興った現在にまで続く一つのストーリーの源流である。ビルを相続した上田哲司さんは、その活用の仕方を模索して、若手クリエイターたちとともに、DIYによってビル内を改装、小分けにして安く貸す事業をはじめた。そこ「やながせ倉庫」には、この場所を面白い人が集まるようになり、サブカルチャーの発信地となった。

2010年には、デザイナーの鷲見栄児さんらの呼びかけに岐阜周辺のクリエイターたちが集結し、自分たちが本当に面白いと思う大文化祭「ギフレク」を企画した。岐阜駅前を中心としたまちなかで実施して大盛況。2011年のギフレクでは、郡上で作られた機械で動く実物大の恐竜模型を柳ヶ瀬の路上に配置して、子どもを集めるイベントを企画し、これも大盛況。この時のつながりから、柳ヶ瀬における若手創業者である岡田さや加さんや建築設計事務所の大前貴裕さん・末永三樹さんが、2013年から本をテーマにした年1回のイベント「ハロー！やながせ」を柳ヶ瀬の路上や空き店舗を会場に展開する。質の高いイベントを企画することに情熱を持った若手クリエイターが集まったことで、より充実した迫力のある経験ができるイベントが連鎖的に実現できた。しかしその反面、集まったプレイヤーたち自身の余暇と資金を使って全力投球したために、達成感を得ながらも消耗してしまう傾向も強かった。

2006年から岐阜市の中心市街地整備推進法人に位置づけられて積極的にまちづくり活動に関与していた「岐阜市にぎわいまち公社（以下、公社）」は、このようなイベント企画を経験する中で、楽しむだけのイベントを繰り返すだけでは持続的な活性化にならない、という見解をもった。公社は商店街活性化プロデューサーを公募し、共感した大前貴裕さんが2011年に就任する。民間の経営的考え方と行政・組合の統制的考え方をつなぐ翻訳を得意とする公社の白橋利明さんとともに試行錯誤を繰り返す中、神戸を拠点に全国のまちづくりを徹底した経営的視点で実践していた古田篤志さん（Jissen.co）の協力を得て、互いにつながる多様なプレイヤーたちによる次のアクションが企画された。それは、市街地を活性化するあらゆる施策の前に、まずは信頼のできるマーケットをつくり、この場所に対するファンを確実に増やすことが必要だという考えに基づいた、未来への第一手だった。

柳ヶ瀬商店街に設けられている全面的アーケードは、天候にかかわらずまちの空間を利用可能にしている。更に必ず毎月決まった日に開催することで、その日に行けば必ず楽しめるという信頼を得ることができる。信頼できる市場を形成し、それに根差して市街地の空きビルを使った新規出店を呼び込もう、という狙いが企画の当初からあった。こうして、有志の「サンビル実行委員会」によって毎月第3日曜日に開催されるSUNDAY BUILDING MARKET（通称サンビル）が、2014年9月に始まった。開催されると、近隣のクリエイターやこだわり店舗が殺到する

図2 SUNDAY BUILDING MARKET



出典：筆者撮影

ようになり、申込時に出店希望者が提示する出店内容・写真・Web ページの情報から選考し、店舗のクオリティコントロールが効いた。果して毎週第3日曜日には、必ず岐阜市街地が華やかで面白い空間になることが、広く期待されるようになった（図2）。

「ここでしか会えないひと」、「ここにしかないモノ」、「ここにしかない空間」をスローガンに、量販店に売っているようなモノとは違う、愛情を持って語ることができるモノやサービスを売るこだわりの店舗だけをセレクトする。面白いことを考え実践している人と接しやすく、つながりやすく、それがまたその場所の価値を上げる。そのように期待された場へ市街地を耕すことが、この企画の本来の目的である。そのことを空間から伝えられるよう、サインやフラッグや会場案内マップなど、ポイントにおいて気の利いたグラフィックを用い、全体の雰囲気デザインされた。この場を最も楽しんでその価値を拡散してくれるのは、やながせ倉庫のサブカルにもよく反応し、また少数ながら柳ヶ瀬の古ビルをおしゃれに使いこなす創業者が現れはじめている30～40代女性を中心的なターゲッ

トとした。ターゲットを明確にしたマーケティングをしているため、なんとなく「販わうため」ではない、一歩踏み込んで砕けたデザインができています。ミユキデザイン（前掲の大前さん・末永さん）やリトルクリエイティブセンター（今尾真也さん）による軽やかでおしゃれなデザインがターゲット層に届いた。

ここで強く興味をもってコミュニケーションをしたお客さんが、このまちのファンになり、次のアクションをしてくれることで、更にまちが面白くなる。そのような人のつながりが生まれるイベントこそが、意味のある、継続性の高いイベントであると回数を重ねるうちに確信できた。もちろん続けるためには、そのイベント自体が次の資金を生む収益性を持たないといけない。サンビルは、安価ながら出店者から集める出店料の収入で成り立っている。

3 柳ヶ瀬を楽しいまちにする株式会社

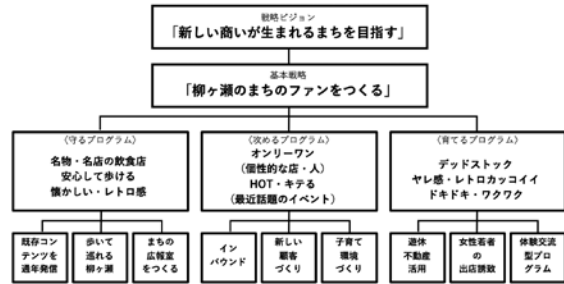
興味を持って見れば、柳ヶ瀬にひしめく遊休不動産は、かつてのこだわりの痕跡であり、サンビルとも親和性の高い魅力ある資源である。こうした資源を最大限に活かして、柳ヶ瀬のエリアマネジメントを本格的に実践するため「柳ヶ瀬を楽しいまちにする株式会社（以下、まち会社）」を2016年末に立ち上げた。株式で集めた資本金1,000万円の出資者層の多くは、柳ヶ瀬の商店街をそれまで支えてきた人士である。立ち上げ時の経営陣は、代表取締役に岡田さん、取締役を上田さん・大前さん・古田さん・林亨一さん（柳商連理事長）・出村（大学教員）と、全員が比

較的新規参入ながらこのまちに関わる本業をもつ多彩なメンバーで構成した。私自身は、2015年末から市街地に研究室「美殿町ラボ」をつくったことから、柳ヶ瀬のプレイヤーたちと交流が多くなり、ちょうどこの会社づくりに携わっている。層の厚いサンビルのファンや魅力あるコンテンツを活かして空きビルに効果の高い客付けが可能になっているタイミングで、サンビルの運営を引き継いだ本社によって魅力的な空間ヘリノベーションする事業に取り組む段階へ進んだ。

市街地における魅力は、公平と不羈の揺れ動くバランスの中にある。サンビルはある種の趣味を掘り下げたようなイベントであるから魅力的であり、平等や公平という原則を守る限りその魅力には辿り着けないことが発見された訳だが、エリアにおける民間の不動産を扱うようなプロジェクトを進めるにあたっては、かえってパブリックな利益を念頭に置かないと本質を見失う。つまり、一つ一つの経営がエリアの価値創造につながるため、エリアのイメージを握る重要な点的プロジェクトの成否は、その後のエリアの公益性を左右することになる。こうしたプロジェクトは、初期投資に必要なまとまった資金を得やすくすべきで、公益性の高さを鑑みれば政策として行政と連携することが望ましい。

こうしたことから、会社創設と同時に、2つの手立てを実施した。ひとつには、エリアについて経営的な観点から厳密な議論を行い、これからのビジョンとその実現に必要なプログラムの見取り図をつくったこと。その過程から柳商連と共有した。ここで掲げた「新しい商いが生まれるまちをめざす」とい

図3 柳ヶ瀬グランドビジョン抜粋
ビジョンとプログラム展開について



出典：岐阜柳ヶ瀬商店街振興組合連合会、2017

うビジョンは、動員人数を稼ぐ刹那的な賑わいを求めてきた近年の傾向と一線を画し、本当の活力とは何かを真摯に考えたものであり、商店街としての本質を突くものであると考えられる（図3）。その後も柳ヶ瀬再生の一つの旗印となり、同時にまち会社の揺るぎない理念となっている。そしてもうひとつには、サンビルの実績やビジョンづくりに表れた会社のパブリックな側面を根拠に、2017年7月岐阜市の都市再生推進法人へ認定されたことである。こうしたことを経て、まち会社が手掛けるリノベーションプロジェクトは、市の政策が期待を寄せる民間事業として成立することになり、後述する中心市街地活性化基本計画の方針転換にも寄与することとなる。

2017年10月には、上階にフィルム映写の映画館を営んでいる築40年を経過したロイヤル劇場ビルの1・2階の空き店舗を束ねてプロデュースし、セレクトショップやアトリエなどの複合した空間「ロイヤル40（よんまる）」をオープンした（図4）。また、惜しまれつつ閉店した名物喫茶のビルを、新たなこだわり空間として蘇らせるプロジェクトは2019年にスタート。これらの取組みには、

図4 ロイヤル40（よんまる）



出典：筆者撮影

まちの魅力は人がつくるもの、という一貫した考えがある。サンビルに参加したことでキッカケを得て、まちとつながりをもちはじめた若い人たちもおり、柳ヶ瀬で創業した新たな店舗も出てきている。

これらの取組みは、第3期岐阜市中心市街地活性化基本計画（2018）の改訂において、それまでの「賑わい」と「まちなか居住」に特化していた基本方針を大きく転換させた。「エリアの空間需要を喚起し、投資が起こる持続可能なまち」という動的なビジョンが新たに描かれ、「まちの魅力となるコンテンツの創出」と「まちの活力を支える居住者の確保」をそのために必要な基本方針としたのである。後者の居住者確保は、ようやく竣工が近づいた再開発地区が多くを担う。それよりも前者についての解像度が高く、リノベーションを活用した新たな商業担い手を創出し、広域からも人を集める魅力を創出・発信して商業を振興するなど、上記実践の経験に基づいた具体的な目標が描かれている。本計画は、市の当局及び中心市街地活性化協議会によって作成されているが、市当局の現場の

状況を掴み取る柔軟さはもとより、協議会支援業務を請け負っていた公社の立場でこそ可能であった分析的視点が、この的を射た方針の樹立に寄与している。そして、第三期計画策定後に就任した柴橋正直市長は、この可能性を察知して、リノベーションまちづくりと再開発（居住拡大）を中心市街地活性化政策の両輪と位置付けた。

4 公共空間利用を視野にいれて

他方で岐阜市は、国の補助を得た総合交通戦略事業の一環として、2016年11月のサンビル当日に合わせ、長良橋通（国道）において公共交通を優先するトランジットモール社会実験を開催し、その後毎年1回ずつ計3年間実施した。トランジットモールは、公共交通に特化して通過交通を制限するため歩行者にとっての利用価値が高まりまちの賑わいづくりに貢献することが謳われているが、岐阜市の場合、サンビルの開催日に合わせて実施したことにより、因果はともかく、賑わいの創出と同交通政策がセットであることが市民に理解されるところとなったようだ。ただし交通規制とそれが生み出す危険への対処に重点が置かれ、道路空間づくりに関して何らかのビジョンを見出せずにいた。賑わい創出の手立てとして市の予算で集めたお祭りの屋台は附加されたが、阻害された歩道にそれらが並ぶ姿は、歩行者に魅力的なサンビル時の商店街空間と比して見劣りし、来客の敬遠するところとなっていた。

翌2019年度にも同様の事業を実施することに決めた岐阜市は、トランジットモールによる賑わい創出の効果を示すため、サンビル

5 コロナウィルスがあってもなくても

2020年度から岐阜市は、柳ヶ瀬に近接し、金華橋通りに接する都市計画公園である金（こがね）公園をリニューアルする事業を手掛けている。近年の柳ヶ瀬への期待の高まりに乗じたマンション建設や遅れてきた先述の再開発による「まちなか居住」の俄かな増加への対応でもある。上記の経験から、既に公共事業に対して官民連携の意義を知り始めている岐阜市は、単に老朽化した施設を新調したり、目新しいデザインへ変更したりするだけでなく、これまで禁止事項の多かった公園の空間で、使い手にとってどのようなアクティビティが可能なのか、試してみる社会実験を経た後に、デザインの実施をするという手順を用意した。この社会実験を公社が請負い、公社はまち会社とともに企画、コロナ禍で延期が続いたが、10月には1ヶ月にわたってOPEN SPACE LABOと名付けたイベントにしたてて実施した（図6）。「まち一番の風景をつくろう！」と呼びかけ、ハレもケも参加者がそこでやれる方法で時間を過ごす、という実験は、それまで潜在していた多くのプレイヤーを顕在化させた。何より発注者で

ある岐阜市当局が、その風景を見ることで、規制的管理だけではない、コトの起こる公園の可能性を実感したことは意義深かった。現在公園デザインの受注者とまち会社の連携したチームにより、この結果を裏切らない改修計画を心掛けて進めている。

2020年は、新型コロナウイルス感染症の恐怖に脅かされ、一時期はサンビルも休止せざるを得ず、公共空間の活用に後ろ向きになる雰囲気も立ち込めたが、そうした脅威も含めて未来を見据え、勇気をもってできることを積み重ねるべく、再び実践が動き始めている。人との物理的距離に気をつかい、消毒・マスクによる対策とともに、適切な空間的余裕をつくって再開した最近のサンビルは、むしろ人とのコミュニケーションを豊かにし、質が高まったという声も多い。11月には、Yanagase PARK LINEも5日間にわたって開催し、屋外に多様に設けられた居場所の空間に多くの共感を集めた。前年よりも時間的余裕をもって空間が創れたことから、ミュキデザイン・伊藤維建築設計事務所と私の研究室、そして沢山の学生ボランティアが、広大な道路空間を屋外の遊び場に変え、昨年以上

図6 OPEN SPACE LABO 案内ポスター



出典：(一財)岐阜市にぎわいまち公社

図7 Yanagase PARK LINE 2020



出典：筆者撮影

に場所の可能性を顕在化させた（図7）。前年から岐阜市はリノベーションスクールにも取り組んでおり、アドバイザーの青木純さんのファシリテーションでプレイヤーとしての意識を高くした人材が生み出されつつある。2年目のリノベーションスクールは、コロナ対策に気遣いながら11月に実施されたが、扱う案件は大きく公共政策へ振られた。柳ヶ瀬は「沼だ！」と表現され、多様なサブカルチャーを含み込み、人と人のつながりを活かし育てるプログラムが是とされた。コロナ禍以前から描いていた未来像は、コロナ禍中にもむしろ選択したい未来であることに気が付いている。すなわち、創業の起こるまちの、その場に居ることが楽しいまちの姿は概ね揺らいでいない。公民連携のよい形は、このような熾りつつあるビジョンをともに抱いてそれぞれの立場でできることをやることなのだろう。

以上に記述した実践の連鎖を可能にしている市役所の苦勞についてこそ、本来は記載すべきかもしれない。そこでは誰もが、既存のシステムを駆動しながら対処しなくてはならない難しさを抱えている。既存のシステムには、想定された限りの諸事を無事に動かすためのノウハウが備わっているため、新鮮な面白さのために既存のシステムを否定するのは誤りであることが多い。しかし、一つ一つ現システムの枠を更新していく勇気のいる努力を重ね、新しい小さな動きに大きな組織が賛同し、容認し、アクティブに動かす当事者になっていくと未来が変わる。今の岐阜市には、そのような人材が少しずつ増えてきているように思う。こうした背景も含めて、面白

い人が集まり、面白いことが起こると期待される場所がどんどん出来ていく時代を、柳ヶ瀬は迎えつつある。